

忍耐と愛と祈り

大槻 虎男

去る世界大戦中、女高師の植物学教室で新薬ベニシリンの研究が行われていた。空中からアオカビの新菌株を捕えて、その製造に成功した。当時の附属幼稚園長の倉橋惣三先生、教育学の菅原教三先生も時々顔を見せて奨励を賜った。倉橋先生の依頼で幼稚園勤務の清水さんに新薬の配慮をしたこともあった。戦後及川、菊池両先生とも時折顔を合せた。

右の御縁で本誌に執筆依頼を受けたが、根が一介の不敏な自然科学徒のこと、かきかけでは筆を折る始末であったが結局一文を書いた。日頃幼児教育に専念される皆様の御苦勞に謝したい心持ちに他ならない。先ず二人の科学者と一人の伝道者のことを述べる。

一、フレイミング（一八八一—一九五五）はスコットランドに幼時を送り、後にロンド

ン大学に入学、卒業の際は多数の賞を一人占めにする優秀な成績で、医学者となった。碩学病理学者アームロース・ライドに将来を見込まれて、細菌学の研究に従事した。小柄で無口、社交べたのこの青年は当時唯一の消毒薬であった石炭酸の副作用を知り、それに代る理想的な殺菌作用を持つ新薬を夢み、これに一生涯を捧げた。偶然のことが彼に幸して、ペニシリンを捕えた。二八年の星霜がこの間に過ぎ去っていた。喰い付いて離れない忍耐が一事を成し遂げるのに大切であることを説示する。人間の平均寿命が幾百年に亘り五十才台を低迷したのに対し、抗生物質の発見により急上昇し、最近二十年間に八十才に達したのは彼のおかげといえる。

二、クラーク（一八二六—一八八六）は明治九年、北大の前身札幌農学校に招かれた。彼は二十才から二年間ゲッチンゲン大学に学び、化学の学位を得て帰国したが、在学中はむしろ植物生理学に興味を持ち、帰米後はその方の科目をマサチューセッツ大学で受持った。樹液上昇の研究は有名である。札幌でも植物生理学と英学を担当した。授業前に聖歌を歌い、聖書を読み、祈禱を献げた。時の開拓使長官黒田清隆は、国法に反すると注意したが、聖書なしに学生の教育は出来ないとして、長官を黙さしめたと伝えられる。フレールが幼稚園を起してから四十年後に、日本最初の幼稚園が東京女子師範学校に附設された。それが明治九年で、偶然ながらクラーク来日の年と一致する。

科学重視の教育の重んぜられた時代に、田舎者の青年達に物心一如の精神を植え付けた。しかも今も尚日本青少年の心の指標として生きている。僅か、八カ月の札幌滞在が一

体どうしてこのような深甚な結果を残したのか。

彼の学生に接する真の愛と、その影にあった天地を支配する全能者に対する祈りとから生じたのではないだろうか。彼の科学と宗教との渾然一致の精神を継承した一人は内村鑑三である。札幌農学校卒業後科学者として水産動物学を研鑽したが、数年で、伝道生活へと道を変えた。「聖書の研究」と題する月刊誌を発行し、聖書を読む態度に科学的方法を導入した。これは科学者にして宗教者たるクラークの歩んだ道と同じ精神であった。

三、シュバイツァー（一八七五—一九六五）は牧師として出発し、後に医学を学んだ伝道者である。南アフリカのオゴエ河上流の奥地ランバレーネに極貧の原地人に医療活動を行い、九十才で蛮地に没した。数多い著作の中に「イエス伝研究史」がある。聖書記事の非科学性―処女降説、死者の復活、病者の癒しなど―はドイツの科学者のキ教に対する絶好の反対材料であった。科学者としての彼はこれを乗り越えた。自伝の中に次のように述べている。

「信仰と史的真理とを正しい意味で相容れるよう努力することは容易ならざる任務である。しかし私はこの天職に悦んで身を献げる。真理はすべてに於てイエスの精神に属すと信ずる故に。」

今や医薬その他自然科学の成果はめまぐるしい。しかしそれですべてが割り切れるものではない。彼の中に生れ育った人類愛と全能者の前に跪き、これに捧ぐる祈りがこの忍苦の大事業を死の直前まで継続せしめたのではないだろうか。

科学(物)と精神(心)とは一人の体内に共存し、それらが更に高次元の同一の法則の支配を受け乍ら外界と反応する。生後間もない時代の軟らかい幼な子の心身の発達にこれが如実に見られる。幼児は授乳の数カ月を過ぎて、自我の目覚めが進行し、自律性が之に続き、次に自分の外にも自我の存在を知り始める。幼稚園保育の時期である。これに続いて少年、青年、熟年、老年と進んだときにこの初期の心身が基礎となり、良きにつけ、悪しきにつけ、廓大され、固定されて行く。

「この小さき者の一人に罪を犯させる人はその首にろばの礮石を頸にかけられ、海の中に投げ入れられる方がましである」(マルコ九・四二)

幼な子に接する人、特に教育者にとって恐ろしい言葉ではないか。

エルサレムに滞在したときに彼に心をひかれたユダヤ教の教師ニコデモが夜間ひそかにイエスを訪問した。イエスは「人もし新たな生れずば神の国を見ること能わず」と説いた。これに対しニコデモは「年をとってからどうして再び母の胎内に戻ることが出来ましようや」と嘆息したという。(ヨハネ三——一五)

この記事も出産前後の比較的短時日における人格の基礎の形成とそれに続く幼児期における教育が如何に重要かを示唆していると思う。幼児期を過ぎてその後神の国を見るのは奇蹟であるということを告げたのである。幼児教育者は実はこの奇蹟の片棒を担いでいるといえる。愛と祈りと忍耐でこれを持ち越えなければならない。